



Title	ヴィジョンの詩学ーワーズワスを中心に
Author(s)	宮川, 清司
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45992
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	宮 川 清 司
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 9 0 7 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 16 年 12 月 20 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	ヴィジョンの詩学—ワーズワスを中心に
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 玉 井 暲 (副査) 教 授 森 岡 裕 一 助 教 授 服 部 典 之 助 教 授 片 渕 悦 久

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、イギリス・ロマン派を代表する詩人ウィリアム・ワーズワス（1770－1850）を中心にして、同じくロマン派の同時代詩人である S.T. コールリッジ（1772－1834）、さらには現代詩人ディラン・トマス（1914－53）と T.S. エリオット（1888－1965）にも言及しながら、ロマン派の詩的想像力（および創造力）の本質を解明しようとした研究である。本論文は、序章、本論第一部 9 章と第二部 4 章、それに付章 1 章から構成されており、総頁 A4 判で 231 頁（注、参考文献を含む）、400 字詰め原稿用紙に換算して約 920 枚に達する大部の論文である。

序章において、まず、ヴィジョンの詩学の輪郭を明らかにする。ロマン派の詩は、ヴィジョンを志向しつつも、それが虚妄にすぎないかもしれないという意識ないしは不安を孕んでいて、その結果、言語芸術としての完成美（product）に達するというよりも、それに至る過程（process）にとどまる、という特質をもっていると主張する。この特質をさらに解明するために、第 1 章以下の各論において、ワーズワスの具体的な詩作品を綿密に分析することを通して、ヴィジョン探求のプロセス自体がヴィジョンそのものに匹敵する力を帯びているありようを明らかにし、ここに、20 世紀文学の特色を先取りする、無意識や潜在意識の世界への洞察を見て取っている。さらに、ロマン派は伝統的なキリスト教思想の枠組みから想像力を解放しようとしたため、特に聖なるヴィジョンにおいてロマン派的曖昧が生まれていることを指摘し、そのうえで、このロマン派的曖昧から自由になって、詩人の体験を可能なかぎり言語表象に密着して追求し、“what” よりも “how” に重点をおいて分析的に解明することがロマン派の詩の本質に迫る道であると主張する。こうして、ワーズワスの代表的な詩作品、『序曲』、『ティンタン・アベイ』、『不滅のオード』、『ジョアンナに』、『サイモン・リー』、『マイクル』、『決意と独立』、『教会ソネット集』などが分析・考察の対象にされる。

第二部では、ワーズワスの友人であったコールリッジを問題にし、代表作『老水夫の唄』における「欄外注」の意味を考察することにより、このロマン派詩人独自のヴィジョンを解き明かし、次に、20 世紀のロマン派詩人ディラン・トマスにおける回想のヴィジョン、死のヴィジョンを考察し、現代におけるロマン派的ヴィジョンのありようを解明する。そして最後に、ワーズワスおよびロマン派詩人におけるヴィジョンをめぐる議論を一度相対化してみる意図をこめて、ロマン派とはある意味で対極的な位置にある詩人 T.S. エリオットを取り上げ、後期の代表作『四つの四重奏』を綿密に分析する。

末尾には、ワーズワスにおける自然とキリスト教の関係を論じた付論が収められている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ウィリアム・ワーズワスを中心にして確立されたロマン派詩学の本質を、ヴィジョンを追い求める詩人の姿勢を考察することを通して明らかにしようとした、本格的なイギリス・ロマン派詩の研究である。ロマン派詩の研究については、ポストモダニズムや文化的・歴史的コンテクストを重視する新歴史主義などに代表される現代批評理論にもとづいた研究が最近盛んになり、詩人自身のヴィジョンについての考察はともすれば軽視ないしは無視されがちな状況にあって、本論文は、ロマン派詩学の中核はあくまでもヴィジョンの探求にあったことを確信し、ヴィジョン復権の道を探ろうとした意欲的な研究である。しかも、ロマン派詩学の特徴は、ヴィジョンの達成にあるのではなくて、ヴィジョンを志向する過程そのもの、ヴィジョンへの到達を模索する運動それ自体に見出されることを強調し、詩的テキストのダイナミズムのありかを解明しようとした粘り強い分析は注目に値する。たとえば、ワーズワスの詩に、明確な客体を指す言葉を避けて、something という、不特定なものを指す言葉が頻出する意味を考察した第3章「something とヴィジョン」は、そうした視点からの優れた論考である。この「ものそのもの」ではなくて、むしろ「ものについての感覚」に強い執着を示す詩学の指摘は、ワーズワスと後期ロマン主義や十九世紀末文学との関わりを示唆する貴重な考察である。さらに、ロマン派詩学の問題性の考察に当たって、ワーズワスの『序曲』、「ティンタン・アベイ」や、コールリッジ、ディラン・トマス、T.S. エリオットの代表的な詩作品を真正面から取り上げ、クロス・リーディングをみごとに実行して見せたことが、本論の説得性を高めている。

本論文に対してあえて要望するものがあるとすれば、それは、ヴィジョンという言葉の概念がときに曖昧になることであろう。また、ワーズワスとコールリッジ以外のロマン派詩人やロマン派第二世代と言われる詩人たちへの考察が幾らかあってもよかった。しかし、これらは本論文の優れた価値を損なうものでは決してない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。